

ユンボギの日記

あの空にも悲しみが

イー・ユンボギ

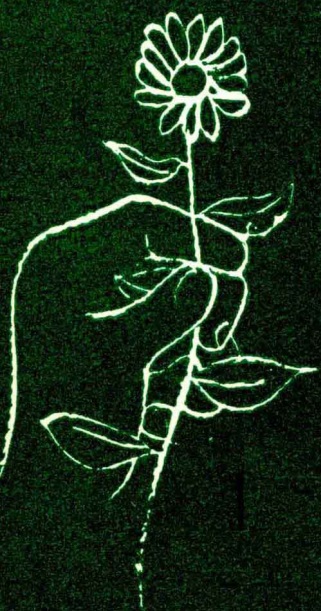
塚本 勲 訳



あの空にも悲しみが

イー・ユンボク

坂本 龍一



つかもと いさお
塚本 勲

1934年大阪に生まれ、58年京都大学文学部言語学科卒。63年同大学院博士課程修了。現在、大阪外国語大学朝鮮語学科専任講師、NHK講師(朝鮮むけ放送 日本語講座)。学生時代から日本語の起源に興味をもち、研究をつづけるなかで朝鮮語・朝鮮文化に関心をもち始め、ついに朝鮮語の研究と朝鮮文化の紹介を生涯の課題とするにいたった

ユンボギの日記

太平選書=07

1965年 6月30日 第1刷発行 ￥ 320

1965年 7月20日 第5刷発行

訳 者 塚 本 勲

東京 都 新 宿 区 四 谷 1-11
高 桑 ビ ル 内
発 行 者 崔 容 徳

東京 都 千 代 田 区 西 神 田 2-19
印 刷 者 矢 部 富 三

発行所 東京 都 新 宿 区 四 谷 1-11 太平出版社 ©
高 桑 ビ ル 内

落丁本・乱丁本は、おとりかえいたします 三松堂印刷・岸田製本

ユンボギの日記

——あの空にも悲しみが——



ユンボギの日記——あの空にも悲しみが——を

お読みになるまえに

☆この日記は、南朝鮮^{イ・ユンボギ}韓国の李潤福^{イ・ユンボギ}（大邱 明徳国民（小）学校四年、十才）少年が、一九六三（昭和三八）年六月から六四年一月までつづった日記を翻訳したものです（原書名は『あの空にも悲しみが』）。

☆ひと……ユンボギ少年のフルネームは李潤福^{イ・ユンボギ}（I Yun-bok）ですが、ふつうユンボギ（Yun-bogi）と、愛称でよばれているので、この日記では、いっかんしてユンボギとよぶことにしました。

ユンボギのきょうだいについて書くと、つぎのようになります。

ユンボギ（潤福）	本人	10才	国民（小）学校四年
スンナ（明順）	妹	8才	国民（小）学校二年
ユンシギ（潤植）	弟	6才	
テスニ（泰順）	妹	5才	

お母さんの家出、それにつづく妹スンナの家出については、日記のなかにその理由と経過がつづられています、お父さんの病気については、よくわかりません。肋膜炎、あるいは肋間神経痛とでも考えてよいかと思えます。

☆とき……この日記がつづられた時期は、朴正熙大統領が、軍事クーデターを終えて、軍政から「民政」に「移行」するために大統領選挙と国会議員の選挙をおこなった「転換」の時期にあたり、冷害と水害、農作物の凶作、とめない物価の値上がり、あいついだ時期にあたります。

☆ところ……大邱は、朝鮮の東南方にあり、慶尚北道の道庁所在地（日本の県庁所在地にあたる）で、産業や文化の中心地であり、とくに古くから漢方薬の市がたつことでも有名です。市内には、洛東江の支流琴湖江が流れ、風光明媚な山紫水明の地です。ユンボギ少年は、その郊外にあるアメリカ空軍基地の近くから、市内の学校にかよっているわけです。

☆さいごに、この大邱は、東京から直線距離でわずか一千キロの地点にあり、東京から下関・博多までと同じ距離、大阪から札幌までと同じ距離にしかあたらない地点にあることを念頭において、お読みくださいますよう――

☆なお、そのこのユンボギ少年の消息については、本訳書の巻末で、できるだけ新しいことからまでおしらせしたいと思います。

目 次

ユンボギの日記を読むまえに.....	2
I	
お母さんは いまどこに.....	7
ぼくはチューインガム売り.....	8
新しい部屋にひっこして.....	21
スナナの家出.....	32
ひもじさをこらえて.....	40
II	
くらい真夏.....	47
お父さんの病気.....	48
ふたたび学校へ.....	58
薬きょうひろい.....	63
軍人兄さん たよりもなく.....	75

III

あきカンをさげて.....	80
シンマイくつみがき.....	85
きょうは解放の日です.....	96
もののねだんはずんずん上がり.....	103
二学期.....	111
お父さんともわかれて.....	118
コレラ.....	124
ランプによせあう小さな顔.....	133
明るさをとりもどして.....	139
あたたかい金先生.....	140
ノランシャツ ツイスト.....	147
ナマ傷.....	154
国会選挙.....	166

IV

先生のペント……………172

新聞にでて……………175

だっそう……………179

お母さんがなつかしい……………188

スナ もどつておいで……………195

ハトになってお母さんとスナをさがしたい……………196

あの空にも悲しみが……………206

新年のゆめ……………216

金先生のけっこん式……………221

訳者あとがき……………226

ユンボギのその後……………228

編集・製作

校 正

装 幀

崔 容 徳

栗 辰 雄

粟 津 潔

I
お母さんは
いまどこに

ぼくはチューインガム売り

6月2日（日） 雨

おかあさん、きょうは一日じゅう雨がふっています。雨がふると、ますますおかあさんにあいたくなります。ぼくは、じっと、ねどこのなかで、どうしておかあさんはぼくたちをおいたまま家をでていったのだろう、と考えています。

おかあさんさえ、うちにいてくれたら、うちのものも、いまこんなに苦しまなくてもいいのに、と思います。

おかあさん、ぼくたち、家賃がはらえなくて、南山洞（……洞は、日本の……町にあたる）の家をおいだされました。それで、おとうさんといっしょに、前の山（大邸テグの前にある琵琶山のこと）のふもとの、大明洞のヤギ小屋にひっこしてきました。

おかあさん、スナはおかあさんの顔をおぼえています。が、ユンシギとテスニは、もうすっかりわすれてしまって、まいにちへおなががすいた、すいた」といっては、たべものをほしがってばかりいます。

おかあさん、ぼくたち、いまたべるものがなくて、ごはんもたけません。スナとぼくがチューインガム売りをしてかせいだおかねで、ウドン玉(うどんは朝鮮語化している)を買ってはたいてたべているようなありさまです。それで、ぼくたちには、生活の楽しみはぜんぜんありません。みんな、悲しい顔をして涙ばかりながしています。

おかあさん、ぼくは、おかあさんと手をつないで遊びにいきたいんです。おかあさんのたいごはんをたべたいんです。でも、いまはおかあさんがいないから、こんなことを考えてもむだですね。

おかあさん、ぼくたち、どうしてもはなればなれになって、おたがいのいどころもわからないでくらさなければならぬのですか。おかあさん、いい生活ができる、できないは問題ではありません。おかあさんは、ぼくたちをかわいそうに思わないのですか。おかあさん、どこにいるのかしりませんが、はやくぼくたちのところへもどってきてください。

ぼくは、おかあさんがもどってくださりさえすれば、いっしょうけんめい勉強します。いうこともよくききます。弟や妹たちは、長いことおかあさんにあえないので、おかあさんのことは話をしなくなりました。おかあさんが帰ってきてくれたら、家のものみんなが、どれくらい喜ぶでしょう。

おかあさん、おとうさんがにくくても、一日もはやく家に帰ってきて、いっしょにくらしみましょう。おかあさん、おとうさんがいま、どれくらいおかあさんをまっているか、知らないのです。

6月3日（月）雨

空はまた雨をふらそうとおもっているのでしょうか、東の方からすこしずつ暗くなってきました。きっと、今年の夏は、ずっと梅雨がづくのでしょうか。きのうも、朝は晴れそうだったのに、夕がたから雨がふりだしました。ほんとうに、ぼくたちのように、その日その日をかせいでたべていくところは、ただのくろうではおつきません。

昼ごはんの時間がすこしすぎたので、ぼくはガムを売りにでかけるのがいやだったけれども、また一食ぬくことを考えると、一銭でもかせがなければいけないと思い、ウドン玉でも買ってたいてたべようと、雨にぬれながら、まちのほうへでかけました。中央通りの「山びこ」（喫茶店）にはいると、お客はすこしだけで、店のなかはがらーんとしていました。

店のなかをぐるっとまわってでようとすると、窓ぎわにすわっていたお客さんが、コーヒーをのむのもわすれたように、心配そうな顔で新聞をみているので、ぼくは、そっとそばにいっ

てのぞきこみました。そして、となりにいるもうひとりのお客さんと話しているのを、たちぎきました。その話によると、大雨がふって、家が水びたしになったり、土砂くずれがおこって、たくさんの人がいきうめになり、なん人も人が死んだということです。ぼくは、とつぜんバラック小屋でねているおとうさんや弟や妹たちのことが、目にうかびました。

きょうは、三十円（日本円で四十二円）もかせいだら、はやく家に帰ろうときめていましたが、夜の十時をすぎて、やっと帰ることができました。雨がたくさんふって、道はどろどろでした。駅前から大邱大学まではアスファルトなので、べつになんともありませんでしたが、大邱大学前のバスの終点から家までは、どろんこ道で、帰ってみると、ひどいはねで、服がだいなしでした。

小屋の中にはいってみると、おとうさんと弟たちはねていましたが、スナはどこへいったのか、みあたりません。きっと、おなががすいたので、たべ物をさがしにいったのでしょう。

ぼくは、マッチをさがして、石油ランプに火をつけて、きょうかせいだおかねを数えてみました。十円さつが三枚、銅銭が七枚でした。帰りみちで菊花まんじゅうを三円ぶん買ってたべたので、みんなで四十円でした。でも、家をでるとき十円もついていたから、けつきよく、きょうは三十円（約四十二円）かせいだことになります。

6月4日（火）曇り

南山洞から、前の山の下のいまの家へひっこしてきてから、もうひと月たちました。おかねがないので、へや代がはらえなくて、おいだされてここへきたのですが、このバラック小屋は、もとはヤギ小屋だったので、へや代はいらないのです。それで、おかねの心配はありません。ぼくは、ねそべったままで、じっと考えてみました。ぼくたちがこんなにくろうするのは、おかあさんがでていってしまったからだと思います。

ぼくは、南山洞からおいだされたことを考えると、ただもう、おとうさんがにくくなります。また、おかあさんのことが、どれくらいうらめしいかわかりません。いま、ぼくたちの生活は、犬やねことまったくおんなじです。

でも、ぼくは、おかあさんが一日もはやく帰ってきてくれたらと、どれほど思いこがれていくかわかりません。

6月5日（水）晴れ

勉強がおわりかけた時のことです。ぼくは、はやく家に帰りたいな、といらいらし

した。すると、やっと先生が、

「では、きょうの勉強はこれで終わります」

とおっしゃいました。

「起立！ 気をつけ！ 礼！」

級長の声がおわるなり、ぼくは、家にとんで帰りました。帰ってみると、おとうさんはすでに、スナとユンシギとテスニがふざけっこをして、遊んでいました。

「スナ、学校へいつてきたの？」

「にいさんよりちょっとさきにもどったのよ」

「はやくガム売りにいこう」

「にいさんさきにいつて。わたし、もうちょっとしてからいくから」

「ばんめし、くえんぞ。はやくいこう」

とせかすと、

「うん」

と、スナは立ちあがりながら、

「にいさん、きょうは、わたしの方がたくさんかせぐわよ」

といいました。ぼくたちは、小屋をでて、二人でまちにいきました。

スナがすこしまえを歩いて、ぼくはスナのとをついていきました。ぼくは、歩きながら考えてみると、弟や妹たちがかわいそうになりました。

こんな生活をしていて、これからさき希望があるのだろうか。そう思ってみると、また、おかあさんの顔が目にとらつきました。どうしておかあさんは、ぼくたちをすてて家をでてしまったのだろうか。もう永久に帰ってこれないような気がします。

夜十時ごろになって、「万味堂」（菓子屋）のまえでスナに会いました。

「スナ、もうやめて帰ろう」

「にいさん、もう一時間だけ売ろうよ」

「スナ、いくつ残った？」

「これだけ。このふたつだけでもうおしまいよ」

といいながら、ガムのつつみをぼくにみせました。ぼくはその声をきいたとき、おもわず涙がでそうでした。

6月6日（木） 晴れ